

日系人 からかわれ、けられ非行へ

いじめの傷語って300回

小学生の頃からいじめを受け、非行に走った経験をもつ日系ブラジル人の具志アンデルソン飛雄馬さん(28)が、三重県の中高校で外国人児童の日本語指導にあたっている。外国人へのいじめや差別をなくしたいと02年から始めた講演は300回を超えた。具志さんは「差別がいかに多くの人を傷つけるか知ってほしい」と話している。

(原田朱美)

11歳で来日、三重の28歳



日本語を習う日系ブラジル人の子どもたちとパソコンを見る具志さん(中央) 三重県松阪市で

犯した過ち 批判覚悟

具志さんが家族と共にブラジルから津市に移住したのは、11歳の時。日本語を全く話せない外国人に同級生は冷たかった。「手でご飯食べてるだろ」。突き飛ばされ、けられた。言葉や習慣を知らないだけに笑われた。いじめは年々激しくなってきた。でも、やり返さなかった。「ここは自分の国じゃない。好きにしてはいけない」と、両親から止められていた。中1のある日、ついに相手の生徒を殴り返した。なぜやったと問いつめる教師には、こたえなかった。「悪いけど、日本人は信用できん」。来日して約2年。味方はいないと、心を閉ざした。暴力をふるうことで、初めて自由になった気がした。高校を中退、暴走族に入った。ケンカをす

るために衝を歩き、自分より強そうな者を殴って英雄気分浸った。しかし、いくら拳をふるっても、幸せは得られなかった。「このままだとただのクズ」。知人の言葉にショックを受けた。息子の非行を嘆いていた父は01年、「何もないことがなかった」と言い残し、くも膜下出血で亡くなった。

父の死をきっかけに生き方を変えようと勉強を始めた。02年、津市と松阪市の小中学校を巡回する国際化対応教育指導員になった。かつての自分のような子どもたちを助けたかった。学校などで講演も始めた。依頼は全国に及ぶ。自分が犯した罪を語ることは怖かったが、訴えた気持ちに勝った。すべての人が理解をしてくれるわけではない。非行を美化したいのかと何度も言われた。自分の過去を非難されるのは、

構わない。ただ、そうやって非行に走る子どもたちの背景は、知ってほしい。今春、一つの事件があった。具志さんが教えるパブロ君(13)が、障害のある女の子をいじめていた同級生を「やめろ」と怒鳴りつけたのだ。いじめは、びたりとやんだ。自分も嫌な思いをしたから、他人に同じ思いをさせたくない、パブロ君は言う。「逆に自分がやられるかも怖かった。でも、具志さんと会って成長したから」

具志さんは今年1月、「多文化共生NPO世界人」を立ち上げた。外国人児童の生活相談や交流会などを開く。いつか、日本で育った彼らと共に、差別のない社会を目指して活動したい。それが、具志さんの夢だ。

朝日新聞

2006年11月19日